

第二回 通院介護支援事業交流会

八月二五・

二六の両日、
全腎協主催の

第二回通院介
護支援事業交

流会が東京品
川プリンスホ

テルで開催さ
れました。

参加者は、

全国各地から

九三名(講師・

全腎協役員・

事務局員(含め)

が集いました。

第一日目は、「移送サービ
スが必要とする人のために」
という演題で、宇都宮大学専
任講師の高橋万由美先生が話
をされました。

大学の講義のような話で、
透析患者の通院事業とは少し
ピンとがずれた講義のように
感じられました。全国から、
通院事業をどのように立ち上
げようかという要求をもって
参加した人々が沢山出席して
いました。

その中で、専門用語を使っ
た大学生にするような話で参
加者に若干の不満が出たよう
です。講義の内容は、移送サー
ビスの本質をついた内容で素
晴らしいものでした。

講義終了後、九つのグルー
プに分かれ、当面する問題に
ついて懇談しました。

二日目は、「事故防止と責
任問題」について、東京ハン
ディキャブ事務局の伊藤正章
氏から、「利用者・ボランティア
の安心のために」について、
それから東京市民センター主
事の藤原孝公氏からアンケー
ト調査を主体にした講義を受
けました。

両先生の講義を基礎に、
①「運営担当者の視点から」
②「コーディネーターの視点
から」の二つの分科会にわか
れ討議をしま
した。「さわ
やか」からは、
江頭会長が①
の分科会、岡
副会長と山田
コーディネー
ターが②の分
科会に出席し
ました。

全国で最初
に設立された
のは「さわや
か」だと、小
林常務理事の
報告にありま
した。五年の
歴史と経験を

もつ「さわやか」の江頭会長
は、事故の問題、介護タクシー
の件、漏血の件、などについ
て、全国の仲間、解決例を
示していました。

全国には、「さわやか」よ
りも素晴らしい経験や教訓を
もった事業所が沢山あります。
今回感じたことは、全国的に
ボランティアの数が少ないこ
と、経済的基盤が軟弱など皆
さん苦勞をしながら、送迎を
されていることでした。「さ
わやか」は息切れすることがな
く、着実に前進することが、
今後の課題でしょう。

交流会で熱弁中の江頭会長



交流会に参加して

「さわやか」 岡 俊一

東京で開催された、第二回
通院介護事業交流会に参加し
ました。

油井全腎協会長の挨拶の後、
小林常務理事の問題提起。こ
こでは各事業所の実績の格差
が大きいことなどが指摘され
ました。高橋万由美先生のさ
まざまな介護ボランティアに
ついての講演。これには福岡
県の介護タクシー問題も出て
きました。引き続き十人前後
が一班になっての討論。全国
各地の事業所・コーディネー
ターの苦悩、問題点が発表さ
れました。事業所を立ち上げ
たばかりのところは、事務所
の確保から、資金繰りの問題。
すでに運営されているところ
ではボランティアさんの不足
「さわやか」でもぶつかって
きた問題はかりです。地方自
治体等の協力を得て、一つづ
つ問題を解決して頑張ってい
ただきたいと思えます。

二日目は伊藤正章氏の「事
故防止と責任問題」と藤原孝
公氏の「利用者・ボランティ
アの安心のために」という演
題で講演を聞きました。その
後の分科会でも、各地区のコ
ー

ディネー
ターから
「ボランティ
ア不足で
思うよう
に運営で
きない。」
「資金がな
く手弁当
でやって
いるのが
実状」な
どの各事
業所の苦
しい現状
が語られ
ました。また大都會での交通
渋滞による悩み、降雪地帯の
冬季の運営休止など、福岡県
の中では分からなかった問題
にも触れることができ、運転
ボランティア運営の難しさを
改めて実感しました。

空も入道雲からいわし雲へ
とパトントッチしたようです。
今年の夏は猛暑と言われまし
たが、その恩恵を受け、今、
秋のくだものたちが色づき収
穫の時を待っています。今年
は香りや甘みが強く、おいし
くなっているようです。

九月の声を聞き、朝晩は急
に冷えこむようになりました
ので、お体には十分お気を付
け下さい。



全国の事業所の会報が掲示されてました。
(もちろん「さわやか新聞」も)

編集後記

空も入道雲からいわし雲へ
とパトントッチしたようです。
今年の夏は猛暑と言われまし
たが、その恩恵を受け、今、
秋のくだものたちが色づき収
穫の時を待っています。今年
は香りや甘みが強く、おいし
くなっているようです。

九月の声を聞き、朝晩は急
に冷えこむようになりました
ので、お体には十分お気を付
け下さい。



油を売る

昔、行灯（あんどん）の油をマスではかり売りした際、しずくのたれるのを、客と話しながら待ったのが怠けるように見えた。これが語源である。

つじつまが合わない

もとは裁縫用語で、ツジは「縫い目が十字字に合う所」、ツマは「襷」の字を当てるが、「着物の裾の左右が合う部分」のことで、したがって合うべきところがきちんと合っていないことから「筋道がよくない」「前後が矛盾する」という意味です。

そりが合わぬ

刀のソリ（反）がサヤ（鞘）に合わないで、ぴったり刀身がおさまらないということから「気が合わない」「しっくりいかない」という意味に使われる。

なんぞ、 なんぞ、 こう言うの。

馳走（ちそう）

走り回って、他人のために尽くすことを言う。これが、つまり人をなすことになり供応を意味する言葉となった。

思う壺

この壺はバクチのときサイコロを入れて振るものである。アタルとかハマルという言葉を伴う。

かきいれどき

カキイレは（書き入れ）で、商人が確實な利益を見こして帳簿に記入すること。それが「掻き入れ」を連想して、できるだけ利益をあげる意味にとられてから、「もうけをあげている最中」という意味で、カキイレドキと使われるようです。

切盛りする

料理で食物をほどよく切ったり盛り付けたりすることであり、それから転じて、事務を適切に処理する意味に使われる。